

ミルトン・メイヤロフのケア論と看護

藤原治美

Mayeroff's Theory of Caring and Nursing Care

Harumi FUJIWARA

ABSTRACT: In his book, 'On Caring', Milton Mayeroff uses the concept of "care" in the broadest sense of the word. According to him, care helps the other growing up, and realizing himself. The object of care can be not only person, but also things as objects, living things, and art. If we take care of the appropriate others, we should be 'in-place'. 'In-place' we can meet others and co-exist with them; of course the other of nursing care is a person.

In this paper I have tried to discuss on taking care of people and being 'in-place'.

Key words: Care, Being in-Place

はじめに

ミルトン・メイヤロフはニューヨーク州コートランドにある州立大学の哲学教授である。『ケアの本質』¹⁾は1971年に著された(邦訳, 1987年)。

ケアという今日用語から我々はその対象を人間と考えがちであるが、メイヤロフはこの著書のなかで、ケアの対象を人に限定していない。ケアすることとは何か、ケアのもつ意味とは何かを広義に論じている。つまり、彼は、ケアの語の源をなすラテン語の *cura*、さらにギリシア語の *therapeia* の持つ意味内容に帰って、原理的に考えようとしたのである。

看護におけるケアの対象は人である。ドロシー・ジョンソンは「看護ケアは健康や疾病の

性質に応じたストレスを受けている個人、又は個人の集団に提供される直接的なサービスである」²⁾と述べている。看護ケアの定義や意義については多くの人が提唱しているが、ここではメイヤロフによるケアのパターン、要素、特質を検討し、看護の観点から、人をケアすることについて考えてみたい。又ケアすることに関して、「場の中にいる」といわれることについても検討を加えたい。

I ケアすること

1. ケアの基本的なパターンと看護

メイヤロフは「ケアすることは相手が成長し自己実現することを援助することである」と述べている。その対象は人格に限らず、理想、思いつきといったものも含まれる。つまり音楽家

にとつての音楽もケアの対象となりうるのである。親が子を、教師が学生を、音楽家が音楽を、というように、ケアの具体的関係において相違はあれ、ケアは共通のパターンをとると言う。

メイヤロフによると、ケアする人は対象を自分自身の延長のように感じとるが、それは不健全な依存や寄生の関係ではなく、ケアする人にとって対象は独立した存在であると言う。又、ケアする人は対象が成長する欲求を持ち、自分を必要としていると感じ、他者の必要に応じて専心的に応答するとも述べている。

このパターンは看護の観点からみると、どう考えられるだろうか。

ヘンダーソンは論文「看護の本質」³⁾の中で「看護の使命を悟ったものは患者を知り、理解しその身になって考えるように努力する必要がある」と述べている。看護において対象を自分自身の延長のように思うとは、患者の身になること、患者と同一レベルにいることと言える。しかしこれは自己と患者を過剰に同一化することとは違う。患者の身になる時には、患者の独自性を認識することが大切である。又、ケアする人とされる人の関係、看護婦と患者の関係は強者と弱者になってはいけない。あくまでも人間と人間の関係である。

ケアのパターンにおいて、対象は成長する欲求を持っている。ここでいう成長することをどう理解するかが問題であるが、メイヤロフは、成長を援助することは対象がその人以外の誰かをケアできるように援助することである、と述べている。つまり、看護において成長の欲求とは患者が他者をケアできる状態になろうとすることであると考えられる。

注意や関心が自己に向いている時には、ケアはできないものであるが、患者は関心が自己に向きがちである。こういう状況下で自分を取り巻く人や物に対してどう関わるかが重要になる。看護婦は患者が他者をケアできるように専心をもって援助することが望まれる。専心というのはあることを集中して行なう場合の首尾一貫性である。その際、他者をケアすることは、

自分自身をケアすることと一つに結びついていると考えられる。

ケアの基本的なパターンは人格ではない対象も含まれるもので、ごく一般的なものである。しかし、看護は対人関係のプロセスと言われるように対象は人である。人をケアすることについては、後で、トラヴェルビーによる「人間対人間の関係確立」を考慮し考えてみたい。

2. ケアの要素と特質

メイヤロフはケアの要素を8種類挙げて説明している。一つ一つ興味深い内容であるので検討したい。

(1) 知識 (knowledge)

ケアするには知識が必要である。ケアする人は相手の要求を理解しそれに応答しなければならない。知識には一般的知識と個別的知識がありそれらは互いに補い合っているという。看護では患者の個別性を考えたケアを大切にというが、それには無論看護の一般的な知識が前提として必要である。患者の個別性を考えた看護を展開することにより看護の一般的な知識が深まっていくとも言える。

相手の欲求に応答するには、その要求を知ることが必要である。知ることには、暗黙に知ることと明確に知ること、直接的に知ることと間接的に知ることがあると言う。暗黙に知るとは非言語的に知る、明確に知るとは言語的に知ると言い換えることができるであろう。メイヤロフは、私たちは言葉にできる以上に良い友人について知っている、と述べている。又、間接的に知るとは、何かについて知ること、それについて情報を得ることであり、直接的に知るとはケアする教師が学生を一個人として直接的に知っていることであると語る。メイヤロフは他に、知っていることとできることは違ふとも述べている。教えることはできなくても、教えることの理論を知っている人は大勢いると言う。

(2) リズムをかえること

自分が行なったケアに対してそれが適当であったかどうかをたえず吟味して確認し、場合に

よってはケアの方法をかえていく必要があると言う。これは、看護においては、看護過程の構成要素である評価にあたる。

(3) 忍 耐 (Patience)

相手にそった方法で相手を成長させるためには忍耐が必要である。忍耐がないということは、待つことができないことであるとも言える。ケアする人の余裕のない態度は、相手に時間を与えないため、相手は自分の思うことが言えなくなる。その結果、ケアする人は自分の考えを押し付けてしまい相手の成長を援助することができなくなる。しかしメイヤロフは、忍耐とは時間的側面だけではないと言う。私達は、気持ちを取り乱した人の話を忍耐強く聞くことにより、相手が自分の考えをまとめたり何かを感じたりする余裕を与えているのだと彼は語る。つまり、忍耐によって生活していく上でのゆとりを相手に与えるのである。

(4) 正 直 (Honesty)

正直とは単に嘘をつかないことではない。自分自身に正直であることは心を開くことである。これは特にケアの対象が人格である時に大切になる。

他者をケアする上では相手のあるがままを見つめる必要がある。偏見で他者を見てはいけない。又、正直であることは自分のケアが適切かどうかを確認することであり、そこに自己評価が含まれる。

(5) 信 頼 (Trust)

信頼が欠如するとケアの成果を求めたり、ケアしすぎたりと言う。メイヤロフは例として過保護な親は子供を信頼していないと語る。この場合、親は子供の成長欲求よりも自分自身の欲求を大事にしていると言える。

相手の成長を信じるためには自分自身を信頼する必要がある。学生の成長を信じる教師は自分の教育観や教育方法といったものを信じなければならない。自分の行動に自信がないと、注意が自分だけに向き相手の要求が見えなくなると考えられる。

(6) 謙 遜 (Humility)

ケアする人は相手の能力以上に自分の能力があると思っはいけない。その思いを克服することが謙遜を意味すると考えられる。自分のケアに価値を求めるのではなく、むしろ、ケアする対象が与えられていることの価値を知るべきである。従って、ケアすることには相手から学ぶことも含まれねばならない。

(7) 希 望 (Hope)

ケアには、自分を通して相手が成長していくという希望がある。将来まで視野に入れた希望は現在の意義を拡大する働きがあると言う。それは、無論、過大な希望を持つことではなく、未来の展望において現在を知る着実な希望を意味するのである。

(8) 勇 気 (Courage)

未知の世界に入るときには勇気がいる。相手がどう成長するのか、自分がどうかかわれるのか予測できないとき、それに取り組むには勇気が必要である。又、相手の成長を信頼するのも勇気が必要である。

このような要素を検討していくとケアの概念の枠組みが見えてくる。

次にケアの特質について考える。

ケアすることはケアする人自身が自己を実現することでもある。しかし自己を実現するためのケアではなく、その結果自分自身を実現するのである。ケアとは単に何かを提供するだけのものではないと言える。

ケアするにはケアすることができるだけの能力が必要である。ケアする側もそれを受容する側も能力がある。例えば、右上肢に麻痺があり神経学的に見て回復の望めない患者に、機能回復のみを目的としてケアしても受容できないであろう。相手の要求に対応しながら、日常生活の自立をめざすケアならば相手は受容できると考えられる。又、相手の要求に対応するためにはケアする人の能力も必要である。

メイヤロフはケアの相手が1人、又1人と変わるようであればケアは不可能であると言う。つまりケアの対象は一定であるのでなければならないと語る。だが、学生をケアする教師や患

者をケアする看護婦の場合に、ケアの対象が一定だと言えるだろうか。

看護の場合、当然のことながら、患者がケアの対象であり、その限り、患者という対象は一定である。しかし、ケアの実践において重要なのは、個々の患者のケアである。患者の人格や疾患や苦しみは患者によって異なる。したがって、看護におけるケアに於いては、対象の不変性というよりもむしろ個別性を考えることが大切になってくるのではないだろうか。

3. 人をケアすることと看護

メイヤロフによると、人格をケアすることは相手の世界で相手の気持ちになることであり、相手と共にいることは相手の為にいることであると言う。又、相手の成長がケアする人のなかに賞讃を起すすと相手気づくとき励ましとなるが、その賞讃はおだてとは違っても述べている。

ケアの基本的なパターンであるケアを通じて相手が成長するためには、ケアする人を信頼する必要がある。そうでないと相手は防衛的で閉鎖的になってしまう。ケアする人の信頼の態度に応じて、相手が自分を表現することで相手の要求が見えだし、それに対応できるようになると語る。

人をケアするときは、相手の決断力の程度によって対応が異なってくる。未熟な子供の場合は代わって決断し、その後を見守る。決断できると思われる人にはそれができるように援助することだと言う。

「相手の世界にいる」ことについてはケアのパターンでも述べたが、ここではトラヴェルビーによる「人間対人間の関係確立」を考慮し考えていきたい。

トラヴェルビーは著書『人間対人間の看護』⁴⁾の中で、人間対人間の関係の確立について述べている。その関係は4つの位相を通りすぎたから確立される。それは(1)初期の出会いの位相、(2)同一性の位相、(3)共感(empathy)、(4)同感(sympathy)である。トラヴェ

ルビーは「共感」は個人が他人の心理状態を理解できるプロセスであるが、獲得した理解に基づき行為を行なうという意味は含まれていないと語る。一方、「同感」は苦悩を救済するために手を貸したいという願望が含まれると述べている。メイヤロフの言う「相手の世界にいる」ということは「共感」を意味すると考えられる。無論、ケアすることにおいては「同感」も含まれており「同感」は「共感」のプロセスを経て生じるものである。

ケアの要素には「信頼」がある。トラヴェルビーによると看護婦と患者が「同感」を体験すると、患者は看護婦を信頼しはじめると言う。さらに信頼は「同感」のプロセスから生まれ、看護婦は信頼されるように行動で示す必要があるとも述べている。信頼関係が確立されていくと患者は安心する。そして自分の心を開く。看護婦は患者の要求に応じた援助を行なうことにより、さらに信頼関係が強まると考えられる。こういうプロセスを経て、人間対人間の関係が具体的に確立されていくのである。

人をケアすること、患者をケアすることは相手の世界で相手と共にいることから、つまり「共感」から始まると言える。それが「同感」のプロセスにおいて深まるのである。患者に限らず人をケアすることは人間対人間の関係確立に等しい。トラヴェルビーの言う4つの位相を通じて人間対人間の関係を確立させていくためには、看護婦自身のあるいはケアする人自身の人格の成長が望まれる。ケアする人は、ケアすることを通じて自己をケアし、成長を遂げるよう努力する必要があると言わねばならない。

Ⅲ 「場の中にいる」こと

メイヤロフは、私達は全面的・包括的ケアによって「場の中にいる」と述べている。ここに、彼のケア論の核心がある。

場については、哲学では西田幾多郎の場所論を始め、数学の空間としての場所等多くの人が論じている。メイヤロフによると、私達はコインが箱にあるような具合に、ある場にいるので

はない。場は、成長していこうという他者の要求に答え、私達が応答することで与えられていると言う。私達はケアすることによって自分の場を発見し「場の中にいる」と考えられる。では、自分の場とは何か。

場というのは、空間として捉えることもできる。しかし自分の場とは単に物理的空間を指すのではない。

中埜肇は著書『空間と人間』⁹⁾の中で事実空間と意味空間について述べている。人間の生活の中には常に事前の現象的な事実とともにそれを超えた意味が働いていると言う。例えば、1冊の本があるとする。それは単に事実であるかもしれない。しかし、その本に様々な思い出があるとするとそれは事実のレベルから意味のレベルに移ると言う。

人間は空間で生物として存在している。それは事実である。人間が人間的であるためには、意味空間を生きなければならない。私達は、ケアすることによって、この世で自分が存在していることの意味を見つけることができる。自分の場とは、他の人や物との関わりの中で、自分が自分らしく生き生きと生きられる空間であると考えられる。

メイヤロフは 又、私達はケアすることによって「場の中にいる」と言う。「場の中にいる」ことができるほどのケアには、その人特有の能力に根ざしている必要がある。自分に与えられた才能を発揮できなければならない。メイヤロフは十分包括的なケアの対象を自己と補充関係(Appropriate others)にある対象と呼んでいる。appropriate とは固有の、特有のという意味であり、自分にとって特有の対象、つまり自分を補って完全にしてくれる対象といえる。

ある人が、教師よりもむしろ音楽家としての方が自分の才能を発揮できる場合、教師としてケアを行なっても「場の中にいる」とは言えない。人は、ある程度自分の才能を発揮できるようなケアの対象を選ぶ能力があると思われる。しかしそのケアがほんとうに包括的かどうかは、実際に生きてみてはじめてわかることであ

る。

自己と補充関係にある対象を見つけるためには、自分自身が成長していなければならない。又、自己と補充関係にある対象を見つけようと努力することが大切だと考えられる。

メイヤロフはケアの対象は一定であると言う。看護におけるケアの対象は患者であり、私達は患者の個別性を重視してケアを行なっている。そこで、看護婦の補充関係にある対象としては、個々の患者のみでなくその人の看護観とも考えられる。この場合、看護ケアは看護観をケアすることの一つと位置づけられる。その人は、看護観をケアすることによって「場の中に入る」と言える。しかし、一人の人間としてみると、補充関係にある対象は一つとは限らない。看護婦であると同時に一人の女性である。医療の場を離れると子供をケアする親であるかもしれない。無論、ケアは専心が要素であるので無数に多くの対象を持つことはできない。

私達は、全面的・包括的ケアによって自己の生の意味を生きている。メイヤロフは、ケアはある中心となるものを設定し、そのまわりに私の活動や経験が全人的に統合されてくると語る。

人は、他の人や物と関わることによって生きている。そこに場が生まれる。「場の中にいる」とは、ケアを通して、つまり人や物との関わりの中で、自己の成長を遂げていながら自分らしく生きていることである。

おわりに

ケアは医療や看護、福祉、教育の場でよく使われる用語であるが、メイヤロフはケアを広義にとらえ、ケアの持つ意味とは何かを論じている。つまり、ケアすることを明らかにしながら、自己の生の意味を生きることについて述べている。その場合は、ケアの対象は一定であるべきであろう。しかし、人をケアすることにおいては、例えば、芸術作品の創造の場合には、音楽や絵画や彫刻とか、あるいは音楽における楽器とかのように、対象は限定されるのである。個々の対象の個別性を重視しなければならない。

メイヤロフのケア論によって、看護の観点からだけではなく、広義でのケアを学ぶことができたと思う。今後も、看護におけるケアのあり方を深めていくとともに、人をケアすることについて考えていきたい。

参 考 文 献

1) メイヤロフ・M: ケアの本質 (田村真・向野宣

之訳). ゆみる出版, 東京, 1989

2) ジョンソン・DE: 看護の科学. 看護の本質 (稲田八重子訳). 73 p, 現代社, 東京, 1989

3) ヘンダーソン・V: 看護の本質. 看護の本質 (稲田八重子訳). 20 p, 現代社, 東京, 1989

4) トラヴェルビー・J: 人間対人間の看護 (長谷川浩・藤枝知子訳). 医学書院, 東京, 1987

5) 中埜肇: 空間と人間. 中央公論社, 東京, 1989